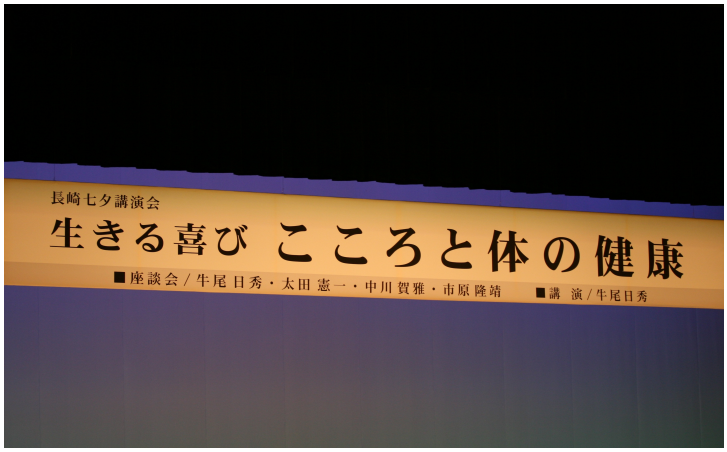
太田東西かわら版　2010･8

「こころと体の健康」講演会【前編】



平成２２年７月１１日。ついにこの日がやって来ました。（長崎七夕講演会）

書籍「母の匂い」と本屋で偶然に出会ったのが３年前。その後、まさか著者の牛尾日秀さんと講演会をご一緒できるなんて想像もしておりませんでした。
主催者側から「太田さんが推薦する人を司会者に立てたいと思っています。
また座談会のパネラーも人選してください」と、今年１月に言われました。
司会にはいっちゃんこと市原隆靖さんを、座談会には薬物依存自立支援団体「長崎ダルク」所長の中川賀雅さんを推薦しました。

会場は定員およそ８００人。チケットは完売。
そして当日は、立ち見が出るほどの満員御礼で始まったのでした。

太田東西は何を語ったのか？

「漢方独自の健康観をお話下さい」と司会の市原さんに促され、用意してきたパワーポイントを表示しました。

１．「異病同治」

２．体の「冷え」を考える

３．「関係性」を考える

「異病同治」

まさに呼んで字のごとく、「異なる病気を同じ処方で治す」という考え方です。
「帰脾湯（キヒトウ）」という漢方薬の効能効果は「不眠症、貧血」。
西洋医学では「不眠症には睡眠薬」「貧血には鉄剤」を処方しますが、東洋医学漢方では不眠症、貧血という異なる病気を、同一処方で治します。
ただ、誰にでも「不眠症で貧血ならば、帰脾湯が奏効する」ということではありません。ズバリ効く体質かどうかを見極める「眼」が必要になります。

「冷え」

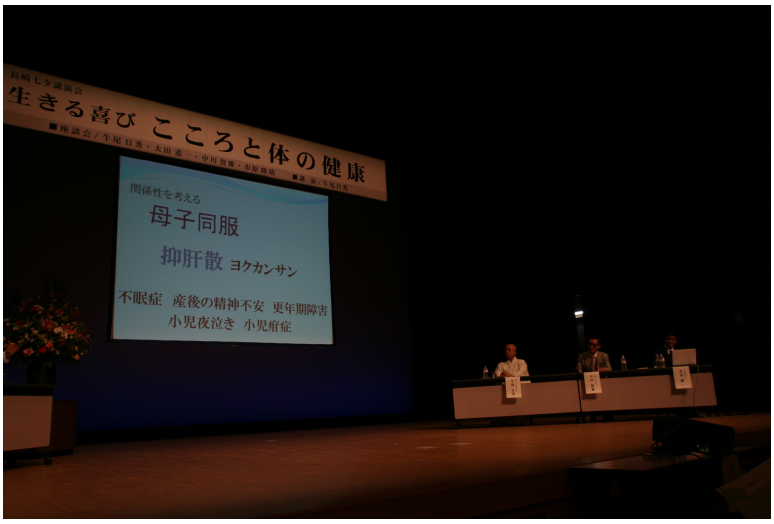
もう太田東西ご利用の皆さんには、「耳にタコのパウル君」といった感じだと思いますが、この時期よくあるのがクーラーでの夫婦、親子ゲンカ。
夫：「暑いぞ～！」と、クーラーの温度設定を１８℃に下げる。
妻：「寒いわよ～！」と、夫がトイレに行っている間にクーラーを消す。
夫：「（戻ってきて）なに消してんだ～！」
妻：「そんなに冷やすと、自律神経が乱れて体調を…」
夫：「うるさい！　医者みたいなこと言うな！」
妻：「どうぞご勝手に！（むかつく～～！）」

この夫のタイプ、上半身は汗かきで熱がりなようですが、下半身は冷えています（上熱下冷）。暑いからガンガンにクーラーをきかせ、グイグイと冷たい飲料を飲む。そうすると下半身（特に腹）が冷える。下半身が冷えれば、上半身は余計にのぼせる。のぼせて暑いから、冷たい飲料、クーラーを好む…の悪循環。
早朝高血圧、心臓病、糖尿病、大腸がん、ひざ、腰、神経痛に要注意です。

先人は、「頭寒足熱（ずかんそくねつ）」と戒めています。

「関係性」を考える

今回の講演会で太田東西が最も伝えたかったことが、このテーマでした。



抑肝散（ヨクカンサン）という漢方薬を例に挙げ、「母子同服」を解説しました。
この漢方の効能効果には「不眠症、産後の精神不安、更年期障害、小児夜泣き、小児疳症」とあります。
抑肝散という処方は、今から約４５０年前につくられた漢方薬ですが、処方の生薬の配合も絶妙ながら、比類ない「母子同服」を唱えています。
子供の病気に対して、子供だけではなくお母さんも一緒に抑肝散を服用するという治療法です。

「子供の夜泣き」と「母親の産後」の関連性。
「子供の疳（神経症）」と「母親のイライラ」の関連性。

母子同服は、「母親原罪説」ではありません。
関連性を考えれば、その母親をイライラ・不安にさせている「誰か」「何か」がいる・あるわけです。それを探究して問題を解決していくのです。

司会の市原さんが「太田さんの母子同服という考え方ですが、いかが思われますか？」と、牛尾さんと中川さんに尋ねられました。

牛尾さん：「私のお寺でもよく感じることです。子供の病気や素行不良の相談でお寺にいらっしゃる方の中には、親御さんに問題があるケースが多いです。
太田さんの関係性を見る考え方は、我々の仏教に通じるものがあります」

中川さん：「薬物依存の大半の原因は家庭環境にあります。私が子供の時、母親と親子心中寸前までいった経験があります。両親の仲は悪く、やがて離婚。
私はシンナーから始まり、覚せい剤にハマっていきました…」

「ダルク」とのご縁から、「関係性」を確信する

「ダルク」とは、Drug　Addiction　Rehabilitation　Center の略称で
薬物依存者の回復・支援を行っている民間のリハビリセンターです。
1985 年に近藤恒夫氏が創設。現在、全国 42 ヶ所に 60 の施設があります。

太田東西が「長崎ダルク」を訪れたのは、昨年冬。
きっかけは、昨年夏の酒井法子事件でした。
なぜ覚せい剤に手を出してしまったのか？　週刊誌を手に取ると、そこには
彼女の「悲惨な生い立ち」がありました。
実母から捨てられ、継母 2 人いずれも父の再婚相手。離婚・再婚の繰り返し。
住む場所も転々…。親の都合で、あっちにやられ、こっちにやられ…。

覚せい剤や大麻など違法薬物にハマっていく人。睡眠薬、向精神薬、鎮痛剤をＯＤ（オーバードース：過量服用）する人。
いったいどんな人達なのか？　どういう生い立ちなのか？
薬剤師が、薬物依存問題を看過していいのか？
こうした思いを胸に、ダルクを訪ねて中川所長と初めて面談。
そして、薬物依存経験者ご本人の口から、「大半は育ってきた家庭環境に原因があります」という事実を改めて耳にしました。

中川さんは自らの生い立ち、覚せい剤にハマった経緯、もがき苦しんだ日々、自殺を決意した心境、母親への思い、弟さんの死が更正のきっかけだったこと…すべてをさらけ出し、多くの面前で語ってくださいました。

今回の講演会のアンケート結果を主催者の方から見せていただきました。
その中に「本音のトークでとても良かったです！」とありました。
「覚せい剤はこんなに恐ろしい！」「覚せい剤は、ダメ、絶対！」。
そうした「教科書的演説会」にはしたくなかったので、嬉しかったです。

昨今、「虐待」のニュースが後を絶ちません。

“覚せい剤に溺れた人間の話を聞いて何になる！”
“自分たちには関係ない！”

そうした傲慢で閉鎖的な家族にこそ「虐待の連鎖」
「薬物依存」のワナが待っています。

長崎ダルク　中川所長